

## 尾瀬沼周辺における自然環境汚染についての考察

須 藤 麻 津 子

尾瀬沼は日光国立公園内に位置する湖で、尾瀬ヶ原とともに「尾瀬」と呼ばれる一帯の中心である。古くから観光地として発達しているが、特に戦後は交通が便利になったこともあり、年間50万人前後の観光客が訪れる。一方、貴重な動植物の豊車で、学術的価値が高く、国の特別天然記念物に指定されるなど保護が必要とされている。本論文では、尾瀬沼周辺の自然環境が、様々な開発や観光地化の影響をうけてどのように変化してきたか、その実態や要因について考察し、観光と保護をめぐる、現在尾瀬沼周辺において起こっている問題を総合的に把握することを目的とした。

現在、尾瀬沼周辺地域では過剰利用が最も問題とされており、それに伴いいろいろな弊害が起きている。尾瀬沼の水質の変化(富栄養化)、ゴミ処理問題、植生の破壊(湿原の裸地化、移入植物など)などがあげられる。そのうち、尾瀬沼の水質の変化について詳しい考察を試みた。

尾瀬沼は中～富栄養湖に分類できるが、同時に腐植栄養湖としての性質ももっている。過去に行われた水質調査のデータを参考に、水質の経年変化を追ったところ、顕著に水質が悪化しているという水質項目はみられなかった。しかし、近年COD値が高い値を示すことが多くなっているし、全窒素も以前と比較するとかなり増えてきているので、少しずつではあるが富栄養化は進んでいるといえる。本湖沼は腐植の影響が強く、特に湖西部で著しい。汚濁要因を出すと考えられる宿泊施設は湖東部に位置することから、水域別に特徴づけられる、ということがわかった。現段階では、はっきりとした差異は認められないが、今後何らかの形で影響が出るとしたら湖東部の水域が最も危険であると考えられる。

汚濁要因として、宿泊施設からの生活雑排水・浄化槽排水があげられるが、後者の影響が大きい。

尿尿は浄化槽で浄化処理された後、尾瀬沼に流される。しかし、浄化槽の処理能力が弱く、観光客が土・日に集中するので一時的に処理能力を越える、というような問題が残る。今後は、質の良い浄化槽の開発などを行う一方で、汚濁源をへらすこともあわせて行う必要がある。

他にもいろいろな問題点があり、一つ一つに対策を講じていくことが大切であるが、最も根本的な問題——過剰利用の状態を緩和させることが重要である。

現在尾瀬地域に入るのには、いくつかのルートがあるが、車道開通により容易に入山できる、沼山峠や鳩待峠などのルートからの入山者の割合が、近年増加傾向にあることがわかった。容易に入山できるようになると、自然の利用の度合いが増え、自然に対する人間の比重が大きくなる。さらに、自然に対して安易な考えを持つ人が増加する、ということにもつながる。自然保護の意識が高まり、大規模な開発は避けられてきたが、新しい問題として、この入山者の質的变化という点がみられるようになった。現在では特に表面化してはいないが、今後、入山者の質的变化が自然に対してどのような影響を及ぼすか、その動向が注目される。

過剰利用はそれ自体が問題であるし、他の諸問題の誘因となりうるので、抑制していく必要がある。直接的原因となる車道建設は今後は一切行わず、アプローチを長くとり、既に開通しているルート口においては現在より徹底したマイカー規制を行うなどの入山制限をとる。一方、入山者に対しては自然解説などを行うなどして自然に対する理解を深める。このようなことを始めとし、各方面からの対策をたてていけば、現在の自然環境が著しく悪化していくという事は避けられるものと思われる。